

# 『上方はなし』に描かれる文法 ——原因理由辞を指標として——

矢 島 正 浩

## 1. はじめに

### 1.1. 『上方はなし』を取り上げること

言語研究で用いる資料は、それぞれの成立事情に応じて選択された言語から成る。それらを用いた言語調査が、言語体系のうちの何を観察したことになるのか、その調査の持つ意味は、一つ一つの資料の性質を正確に捉えることによって初めて特定される。特にコーパスが次第に整備され、それらを効果的に用いた計量的な研究が進展を見せる昨今において、特定の資料がそれぞれに有する言語的特質を凝視し、それによって見えてくる部分があることを知っておくことは、ますますその重要な度合いを高めてきていると言える。

このことを具体的に示すため、本稿では落語速記本『上方はなし』を題材に、その成立事情に応じた文法を用いるさまを取り上げる<sup>1</sup>。落語は近代日本語を知る上で有用な資料である(矢島 2019b 参照)。『上方はなし』全四九集(楽語荘)は、五代目笑福亭松鶴主宰の落語同人誌であり、多くは松鶴が演じる、落語 56 話 = 約 505000 字分の速記が収載されている。松鶴は明治 17 年大阪市西区京町堀に生まれ、昭和 10 年 3 月笑福亭松鶴(5 代目)を襲名する。昭和に入って漫オブームが到来し、上方落語が衰微することを憂え、松鶴が 1936 ~ 40(昭和 11 ~ 15)年に私財を投じて発行したのが『上方はなし』である。落語については、特に SP 盤レコードに録音されたもの(以下「音声落語」とする)を資料とした研究が先行して進んでいる。例えば金澤・矢島(2019)では、音声の大阪落語 51 話(1903-26 年)、東京落語 76 話(1903-13 年)を対象とした言語研究を

<sup>1</sup> 『上方はなし』全体を対象とした本格的な言語学的研究の嚆矢として竹村(2016)がある。竹村により、本資料の語彙には近世上方語の残存が一定量認められること、五代目松鶴が生育した明治期の京阪方言、一部には昭和期に出現するはずの用法も見られることなどが明らかにされている。本稿は、氏の知見に基づきながら、さらに別角度から上積みを図ろうとする試みである。

また矢島(2013)でも『上方はなし』を用いた研究を行っているが、調査対象としたのはわずか 3 演目であり、目的も、松鶴が音声で語った噺と速記本に書き起こした噺と同一演目の落語を取り上げて、両言語がどのように異なるのかを明らかにしようとするものであった。その段階では、速記本の文字資料としての制約・古態性を明らかにすることに主眼があったが、本稿では加えて速記本の言語資料として積極的に位置づけられるべき側面を指摘しようとするものである。

行い、音声落語の近代語資料としての有用性、さらにそれに基づいた近代語の姿などを詳細に明らかにしている。『上方はなし』には、そういった音声落語と共通した落語としての文法を用いてもいれば、『上方はなし』にのみ固有の側面を有してもいるであろう。そして大きくは、近代大阪語、さらには近代共通語として広く共有される方法がその基盤を構成しているはずである。

本稿では、資料の、そういった複数の要素に応じた文法形式の選択が実現している側面に注目する。それぞれのあり方の観察を通して、『上方はなし』の文法が「落語」というコンテキストに対応しながらも固有の性格を持ち、なおかつそのすべてが日本語史の総体の一部を構成する様子を見定める。

『上方はなし』については、竹村（2021）に詳しい解説がある。竹村は『上方はなし』を言語資料として広く利用できる形で供することを目指して、資料整備の部分から精密な作業を行っている。本研究も、氏によって構築されたコーパスを用いて行うものである。竹村（2021）に、最新の『上方はなしコーパス』関連のデータは、以下のサイトで配布しているとある。

<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?kamigata>

なお本稿は、「『上方はなし』コーパス公開発表会—五代目笑福亭松鶴の落語を検索する—」2019年3月16日（AP 大阪淀屋橋）にて配布された以下のデータを用いている。

※竹村明日香（2019）『『上方はなし』コーパス（試作版）』（2019年3月15日確認、『ひまわり』ver.1.6.2）を使用。

## 1.2. 方法設定

### 1.2.1. 原因理由辞を取り上げることについて

本稿では、検討の指標として原因理由辞を取り上げる。同表現は『上方はなし』で複数の形式を並行して用いており、なおかつ、それぞれの用法差が顕著ではなく、相互に互換可能な場合がある。例えば山本（1962）では、「サカイ（二）とヨッテ（二）は全く伯仲して用いられる。この両者には、男女・老幼・地域・あるいは理由・原因の主観性客観性等の上の何らの区別もみられず、両者全く同じ機能に用いられている」などと述べている。そのように類似性のある形式は、各資料の成立事情に応じた選好指向を反映した使用状況を示すことが予想される。

ただし、当然のことながら、各形式はそれぞれ固有の用法も有する。金沢（1993）は、近世後期上方語から明治期大阪語におけるサカイ・ヨッテ、さらにはカラ・ノデなどを調査し、近世後期・末期、明治期まで、概してヨッテがサカイを圧倒して用いられている様子がうかがえること、並行してカラ・ノデが安定的に用いられていることを明らかにしている。さらに明治後期 SP 盤レコード落語に基づく調査を踏まえて、ヨッテが特定の噺家に偏って用いられること、登場人物は男性使用に集中すること、サカイが次第に増加し、とりわけ若年層や女性の使用例が比較的多いことなども指摘する。金沢によ

れば、近代のしかるべき段階で、大阪語ではヨッテからサカイへの交代があった可能性があることになる。

方言文法全国地図 (GAJ 33 図「雨が降っているからいくのはやめろ」、37 図「子どもなのでわからなかった」) の分布からも近現代日本語の状況を知る材料が得られる。それによると、近畿地方ではサカイが中心であり、大阪や奈良などにヨッテの分布が確認されるが劣勢である<sup>2</sup>。デ・ノデも京都北部、奈良の山間部や兵庫・滋賀・三重などの周辺部に散在し、しかも他の形式との並行回答の箇所もある。なお、ノデに関しては、丁寧体で用いられることが指摘されることもあり (船木 2007<sup>3</sup>)、位相の点でやや特徴的なところを有する点で注意が必要である。

『上方はなし』は刊行が昭和初期であるが、落語で演じられる噺は金澤の検討する明治末期の落語と交錯する。日本語史に『上方はなし』を位置付ければ、金澤の指摘にあったように、カラ・ノデの安定的使用、サカイ類の隆盛、ヨッテ・デの衰退傾向がどのような形でうかがえるのかが問われることになる。そのあたりを念頭に、以下、原因理由辞を観察していく。

### 1.2.2. 比較資料に音声落語・談話資料を用いることについて

本稿では、『上方はなし』の資料性を見極めるために、音声落語及び談話資料を比較対象としていく。

落語は音声による口演が基本であるが、ここで注目しようとする『上方はなし』は速記本であり文字媒体による資料である。速記本として、すなわち書記活動の所産としての特徴も加わることによって音声落語とは異なった言語使用の傾向も有するはずである。音声落語との比較によって、両資料のそれぞれの特徴が効果的に見定められるものとする。

また、そもそも落語で描かれる世界は内容がフィクションであり、芸事として十分な推敲を経た創作言語である。そこでは「疑似的な談話」が描かれはするが、「落語」という伝統話芸にふさわしい文体にブラッシュアップすべく幾重にもフィルターがかかっているとみるべきである。談話資料との比較は、落語という文芸の有する特性を押さえるためにも、また近代大阪語として共有される部分を明らかにするためにも重要である。

<sup>2</sup> 中井 (2008) は明治半ばから大正前半生まれの話者による京都市方言を調査対象として、ヨッテ系は現れる話者が限定されていること、しかもその話者もサカイ系の方が多いことなどに触れている。

<sup>3</sup> 船木 (2007) により、京都市方言ではヨッテが衰退形という位置づけゆえかすでに取り上げられず、サカイ類・カラ・ンデ・シが検討対象となっている。ンデが丁寧体で使用されることのほか、カラの意味・機能の広さや、サカイ類の用法上の制約などについて言及がある。

調査に用いた資料は以下のとおりである<sup>4</sup>。

○音声落語：SP 盤落語レコード資料。金澤（2019）に記す演目の文字化資料によるコーパスを使用。

- ・大阪落語 51 話（1903-26 年）落語家 10 名。3 時間半程度。
- ・必要に応じて東京落語 76 話（1903-13 年）落語家 13 名、5 時間弱程度も参照。

○談話資料：『日本語諸方言コーパス（Corpus of Japanese Dialects：COJADS）』中納言 2.4.5 データバージョン 2021.01 を使用。

- ・文化庁が 1977～1985 年に行った「各地方言収集緊急調査」の方言談話の収録データを使用。
- ・検索対象は「大阪」を選択。結果として「談話ジャンル」は「自然談話」のみとなる。
- ・同コーパスの短単位検索の標準語訳「～から～ので」の検索データを調査対象とする<sup>5</sup>。

「から」…キー：語彙素読みカラハ品詞接続助詞

「ので」…前方共起：語彙素読みノ キー：語彙素読みダハ品詞助動詞ハ活用形連用形

### 1.2.3. 検討対象とする語形について

本稿では、使用数が上位となるカラ・ノデ・デ・サカイ・ヨツテを主な検討対象とする。本文中で表示するに際しては、それぞれサカイに「さかい・さかいに・はかい・はけ…」、ヨツテに「よって・よってに・って（に）…」、ノデに「ので・のんで・んで…」の各語形を含めるものとする。前項に示す調査方法に従うと、ほかにユエ（76 例。以下カッコ内は用例数）、モノ（デ）（24）、バ（18）、ニヨツテ（17）、タメニ（9）、シ（8）（トコロカラ・ダケニ…）なども該当するが、「(他)」として一括し、それぞれの検討において用例数の分布を示すのみとする。一部、本文中で言及するところもある。

<sup>4</sup> 本稿で調査対象として取り上げる資料の成立期は、『上方はなし』が昭和初期（1936-40）、音声落語が明治後期～大正末期（1910～1925）、方言談話の被調査者の生年が1900年初頭（録音1980年前後）である。本文でも一部触れるところであるが、特に方言談話に関しては、その録音年からしても共通語化の影響を勘案する必要がある。成立期の相違に基づく影響部分は課題の残るところである。

<sup>5</sup> この方法に拠ると標準語訳に「～から～ので」が当てられたもののみが原因理由表現として得られることになる。その欠を補うために、方言テキストに対しても検索可能な「文字列検索」でカラ・ノデ・ンデ・ノンデ・デ・サカイ・ハカイ・ヨツテ・ツテ（二）の各形式を検索ワードとして検証を行っている。本稿ではさらに、以上の方法によって得られたデータから、目視で原因理由表現を構成している例以外を除外し、検討対象を限定している。

### 1.3. 課題の整理

以下、『上方はなし』を言語資料として観察する際の補助線として、本稿では3つのレベルで用いられる文法の層を想定する。

- I. 『上方はなし』資料固有の文法
- II. 落語資料としての文法
- III. 近代大阪語としての文法

まず資料で用いられる言語の骨格・基盤部分をⅢが形作る<sup>6</sup>。落語としての諸要素が関与してⅡが発現することによって表現の基調が構成され、さらにその中で『上方落語』固有の表現方法をとることでⅠの運用が現れるという関係性にあるという想定である。

このうちのⅢはⅠ・Ⅱの特徴づけを超えた近代大阪語に広く共有される用法であり、各資料で用いられる言語の根底部分に前提としてあるものである。Ⅰ・Ⅱの検討も、そもそもⅢの把握と一体的に成り立つと言える。そこでⅢについては、Ⅰ・Ⅱを検討する中で同時に問われる部分について言及していく形とする。Ⅰ・Ⅱに関しては、以下の仮説に基づいた問いを設定する。

- I. 『上方はなし』は速記本かつ同人誌としての定期行物である。演者に速記者、編者が関与することでかかるフィルターによって実現する文法があるのではないか。
- II-1. 落語という演芸である以上、登場人物には、それぞれの識別をしやすくするためのキャラクター設定が行われているはずである。その事情によって、特定の登場人物には特定の接続辞を使用させる場合があるのではないか。
- II-2. 落語という話芸にふさわしい話し方があることが見込まれる。その口吻を形作るため、因果関係の把握・提示に際して特徴的な表現を用いる（または、ある形式の使用が抑制される）のではないか。

以上の見通し・仮説に基づいて『上方はなし』の言語運用を順次観察していく。

## 2. 『上方はなし』における原因理由辞の選好傾向—Ⅰの検討～その1—

### 2.1. 他の資料との比較より

『上方はなし』で用いる原因理由辞にはおおよそどのような特徴があるのか、まずは談話資料及び音声落語との比較を通じて捉えておく。以下に、各資料における原因理由辞を形式別使用数で示した(表1)。なお、落語は会話と地から成る。会話には双方向

<sup>6</sup> 本来的には、4つ目の層として「Ⅳ. 近代共通語としての文法」という、全国共通語を基盤とした言語層が想定されるところである。本稿でもその層との関係に言及する部分も一部にあるが、大阪語と共通語の関係を正面から議論するだけの十分な用意がない。その層を含めた検討は今後の課題とする。

表1 各資料における原因理由辞使用概要

| 資 料      | カラ  | ノデ  | デ   | サカイ | ヨッテ | (他) |
|----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 談話資料     | 211 | 41  | 7   | 89  | 30  | 15  |
| 落語 音声 会話 | 36  | 11  | 8   | 64  | 26  | 5   |
| 地        | 27  | 11  | 1   | 10  | 4   | 5   |
| 上方 会話    | 145 | 499 | 218 | 234 | 288 | 102 |
| はなし 地    | 74  | 232 | 8   | 16  | 7   | 36  |

性の特定個人間のやり取りが、地には噺家から観客という不特定多数者に向けた一方向性のコミュニケーションが描かれる。その相違を見るために会話と地とを区別している。

まず談話資料と比較すると、落語の「会話」ではカラが少なく、音声落語ではサカイやヨッテ、『上方はなし』ではノデ・デ・ヨッテを高頻度で用いている様子が見て取れる。談話資料がカラを多用していることについては、共通語化の影響があると見るべきであろう。ただし『上方はなし』の「会話」では、カラは5形式中最低頻度であるのに対して、音声落語ではカラは5形式中2番目に多用されている。『上方はなし』ではカラの使用に積極的ではなかったということは言えそうである。資料の性質とどう結びつのか、検討の必要がある。

もう1点注意したいのが、『上方はなし』では、ノデ及びデに関して、特に多用傾向が見えることである。その点においては、談話資料とも、また音声落語とも大きく隔たった姿を示すのであり、速記本としての特徴が顕著に現れている。デは、1.2.1で確認したように、GAJ33・37図によれば近畿地方においては京都北部をはじめとする周辺部に分布するのみである。大阪府では回答地点が見当たらず、今日ではかなり劣勢である。また、ノデは敬体での使用が多いことが指摘されることがあった。その意味ではノデ・デともに、他の形式とやや役割を異にする面があると言える。以下の検討に際しては、そういった特定の役割を帯びるノデ・デを、『上方はなし』がどういう状況で多用しているのかということについても、問うていく。

## 2.2. 使用部位別使用概観

接続辞は、構文中の使用部位によって、発話における働きという点でそれぞれ異なった役割を果たす。以下の例(1)は前件の従属節を構成して後件をつなぐ典型的な接続辞(以下[接続助詞]とする)であるが、(2)は文の冒頭で接続詞的に用いられるもの(以下[接続詞]とする)であり、(3)は文の末尾で終助詞的に用いられるもの(以下[終助詞]とする)である。[接続詞]の中には、(2a)のように先行文を原因とする結果を導く論理関係を表すものもあれば、特段そういった関係が読み取れない(2b)のごとき例もある。[終助詞]にも、コンテキストから順当な帰結句を想定しやすいもの(3a)も、そういった想定がしにくいもの(3b)もある。

(1) まあ貴方の事やさかい地所でも買ふて家でも建てなはるのやろ。

(「高津の富」33集 p.39)

(2) a 「併しあないにしてたら腹が減るやろう」「そうやさかい板場が附いて居るねン、是から御馳走が出るねン」  
(「遊山船」38集 p.19)

b 済まん済まん。そや依てに機嫌直して一杯丈け飲んで。…

(「土橋萬歳」21集 p.31)

(3) a ヘエこれは……豪ふお陽気相におますさかい。私いも鳥渡踊らして貫はふと思ふて……。

(「貧乏花見」24集 p.69)

b ハ・ア、道理で大きな尻やと思ふたワイ。……此松忽ち大ケツと成り云ふさかいナ……此方の妓は又、豪う威張めた顔してるねナ。オイ一遍此方に向いて見せたら何ふや……

(「三人兄弟」19集 p.20)

(2) の〔接続詞〕は、前に続く談話の流れを順当に引き受け、以下に自身の発話を続ける合図として用いられている。コンテキストにおける前文との意味配置を明示するとともに、談話展開に対する話者の正当性を明示する役割を担っている。そのうちの (2b) などは、先行文脈内に特定の表現の呼応が見出しづらく、話者の談話展開に対する関わり方を専らに示す用法と言える。

〔終助詞〕に関しても同様で、いずれも接続辞で承ける事態に対して、順当に続く内容を持ったコンテキストが続くものである。その中には (3a) のように後続の文とそのまま、あるいは文脈の中で因果関係を認めることができるものもあれば、(3b) のように直接的に他の表現部分の理由表現としてつなぐことができないものもある。前者は呼応する事態の生起には理由があると考えていることを聞き手に述べるものであり、後者は聞き手に対して話者の発話態度が正当であることを伝える意味合いが現れるものと言える。

このように、発話の冒頭には話し手が談話をどのように展開させたいかという「主観的でメタディスコース的」な意味が現れ、発話の末尾には「話し手が導き出した結論に対して聞き手に確認を求める」ための、聞き手との関係を調整する「間主観的」な意味が現れやすい (以上、澤田他 2017)。こういった視点から発話文中の使用部位別に弁別を施し、使用状況を整理すると、次頁の表 2 が得られる。

談話資料では構文周辺部 (〔接続詞〕〔終助詞〕) での使用が目立ち、相対的に命題構成部 (〔接続助詞〕) での用法が少ない。落語資料のうち『上方はなし』は、談話資料とは大きく様相を異にして〔接続助詞〕としての用法が大半となり、〔接続詞〕〔終助詞〕の用法はごく限られたものとなる。音声落語はその中間的な位置を占め、〔接続詞〕〔終助詞〕の頻度が『上方はなし』の 2 倍程度はあるものの談話での多用状況には及ばず、中程度の使用状況にある<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> 東京の音声落語、談話資料を調査した場合 (対象資料は 1.2.2 参照)、表 2 に示す大阪

表2 用法別使用概要

| 資料       | [接続詞] | [接続助詞] | [終助詞] | 総計   | [接続詞] | [接続助詞] | [終助詞] | 総計   |
|----------|-------|--------|-------|------|-------|--------|-------|------|
| 談話資料     | 85    | 160    | 148   | 393  | 22%   | 41%    | 38%   | 100% |
| 落語 音声 会話 | 10    | 111    | 29    | 150  | 7%    | 74%    | 19%   | 100% |
| 地        | 1     | 53     | 4     | 58   | 2%    | 91%    | 7%    | 100% |
| 上方 会話    | 60    | 1283   | 143   | 1486 | 4%    | 86%    | 10%   | 100% |
| はなし 地    | 1     | 362    | 10    | 373  | 0%    | 97%    | 3%    | 100% |

[接続詞]の中には、(2b)に見るように前後の文の論理関係を示すのではなく、いわば談話との関わり方を表すものがあつた。[終助詞]も(3b)などは、自身の談話の正当性を聞き手に示そうとする標示である。このように、話し手の、談話あるいは聞き手に対する態度を積極的に表すことができる[接続詞][終助詞]が談話資料では使用頻度が高く、落語資料ではそれと比べて大きく下回るということである。また、同じ落語資料でも『上方はなし』はさらに速記本という書記言語としての特性が加わる。その特性を有することによって音声落語よりもさらにその使用頻度を下げているということが、この調査結果には現れている。

落語のような脚本ありの疑似的な談話では、優先順位の高い表現を選別して、洗練され、再構成されることで実際の談話とは隔たりを生じる。落語で展開するコミュニケーションでは、実際談話ほどには[接続詞]や[終助詞]による談話や聞き手への関わり・態度表明を行っていない。囃子から聴衆に向けて、いわば一方向性を持った発話を行う「地」においてはその傾向は一段と顕著である。

実際の談話では、論理よりも話者の「つもり」の方が先立つことが間々見られる。その場合、AがBの原因であることの説明よりも、AがBの原因なのだということをわかってほしいという思いの方が前面に立つ。一方、落語では、客に聴かせる会話のやり取りが、客によりよく理解されること、達意であることが優先される。[接続詞][終助詞]はその目的からすればむしろ無駄なものであり、台本をもって整える文体においては優先順位が下がるということなのであろう。

このように、人為が加わる落語の文体においては、音声資料、さらにそれに輪をかける形で速記本において、談話での運用との違いを生じている。少なくとも上記範囲の落語資料では、日常会話で本来重視される談話構成態度の表明が稀薄化し、談話構成内容の伝達が中心になっているところに「落語の文体」としての意識が写し出されていることが確認される。

の両資料における使用状況と大きくは異なる様子が観察される。つまり、表2には地域的な特性よりも、資料の性質・成立事情が優先的に反映した結果が示されていると理解される。



### 3. 『上方はなし』の成立期と言語特性の関係—Iの検討～その2—

#### 3.1. 『上方はなし』の成り立ち

『上方はなし』は全集を通して均一な言語資料というわけではない。矢島（2013）において、編集担当者・速記者の異なりなど、様々な事情変化とともに、言語文体としても様々な面を含み持つことを指摘した。その視点から、原因理由辞の使用状況を見ておく必要がある。

本来、速記本の筆録者別に言語状況を確認したいところであるが、現状では筆録者は特定できないものが多い。そこで、『上方はなし』の成り立ちに関わる要素として主編者に注目したい。次は『上方はなし』の編集後記中の記事である。

- (4) 松鶴君の落語も、静圃君（稿者注：中浜静圃＝四代目桂春団治）が手を入れると  
 いうのは語弊があるが、筆記するようになってからは、原意をくずさずしかも読みものとしても調子のあった読みいい、がっちりとした内容のものとなってきたことを特記したい。（第24集 野崎万里「『上方はなし』二年を見る」の記事より抜粋。1971年「復刻版」三一書房による）

この記載には、『上方はなし』に掲載される速記本が口演という一回の音声を逐語的に直写したのではなく、読み物としての完成度を考え、苦心の「校正」を経て成ったものであること、そしてこの第24集に関しては主編者の中浜静圃が直接筆録に携わっていたことがわかる。主編者の筆録への関与の度合いは、各集においてどういった濃淡だったかは判然としないものの、手順として、編者の方針に沿った人為が反映しているか否かを確認しておく必要がある。

矢島（2013）では、主編者の移り変わる様子を表3のように取りまとめた。

以下、表に示す期間で仮に区切った際に、使用される言語にどういった相違が見られるのか（あるいは見られないのか）を調査していく。

表3 『上方はなし』主編者の移り変わり

| 集       | 主編者                    | 中浜静圃<br>の関与 | 区分け |
|---------|------------------------|-------------|-----|
| 第1・2集   | 沓脱英介                   | ×           | A   |
| 第3-16集  | 松鶴（10集以降、中浜静圃の関与が増えるか） | ×           | B   |
| 第17-30集 | 中浜静圃                   | ○           | C   |
| 第31-35集 | 堅丸（野崎万里か）              | ×           | D   |
| 第36-46集 | 野崎万里                   | ×           | E   |
| 第47-49集 | 中浜静圃                   | ○           | F   |

### 3.2. 用法別使用状況の変化

最初に、『上方はなし』における〔接続詞〕〔終助詞〕及び〔接続助詞〕の使用頻度を、刊行期 A～F 別に見る。比較の意味で、談話資料と音声落語の状況も図示している（図 1。以下、図中の数値は用例数を表す）。

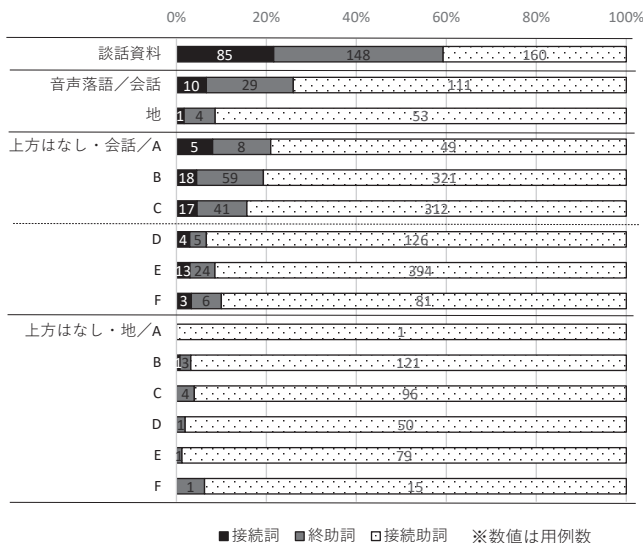


図 1 用法別使用概要

『上方はなし』のうち「地」では〔接続詞〕〔終助詞〕がほとんど用いられない。これら構文周辺部の用法が双方向性の対話でこそ役割を発揮するものであることが関わっている。一方「会話」の様子を見てみると、『上方はなし』を刊行期で区分した最初期の A では比較的音声落語の使用状況に近かったものが、次第に頻度を減らし、後半期では速記本固有の特徴を明確にしている様子がうかがえる。〔接続詞〕〔終助詞〕は、文と文の論理関係や文脈の流れを表すディスコースマーカ―として用いることができる。その使用頻度が特に刊行初期の『上方はなし』の前半期の「会話」で高めであり、後半期では低い。つまり後半期は、より実際の談話の姿からは隔たった、同資料固有の表現が醸成されている可能性があるということでもある。

### 3.3. 原因理由辞別使用状況の変化

次に『上方はなし』の接続辞の形式上の使用傾向を、刊行期別に見てみる。〔接続詞〕〔終助詞〕等の用法上の区別はせずに、各期の原因理由辞の形式別占有率に着目して、全体的な傾向を把握する（図 2）。

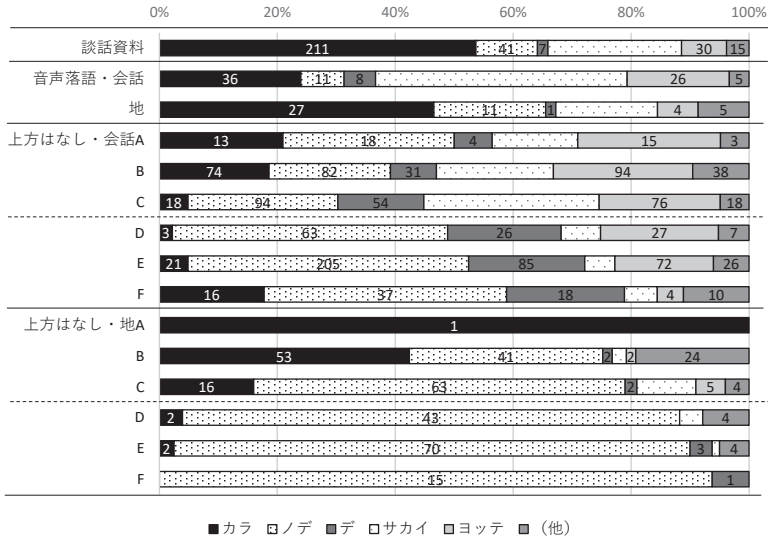


図2 原因理由辞別使用概要

ここで見て取れるのは次の諸点である。

\* 会話

前半 A～C に多用傾向が見える形式

カラ (C は除く) サカイ

後半 D～F に多用傾向が見える形式

ノデ デ

はっきりとした使用傾向が見えない形式

ヨッテ (微減)

\* 地

前半 A～C に多用傾向が見える形式

カラ

後半 D～F に多用傾向が見える形式

ノデ

はっきりとした使用傾向が見えない形式

デ (微増) サカイ・ヨッテ (微減)

以上より、『上方はなし』では、ABC 対 DEF の使用状況は、会話・地を合わせてざっと以下のようにまとめられる。

○ ABC → DEF : ①カラ・サカイの減少 ②ノデ・デの増加 ③ヨッテの微減

この変化は、初期ほど音声落語 = 速記本と近い表現方法にあったものが次第に乖離し、同時にまた自然談話との距離も広がっているということでもある。速記本の執筆姿勢として、刊行の当初は、落語の「口演の再現度」を挙げることに意識の重心があったとす

れば、時期が進むにつれて、口演とは切り離された「読み物としての完成度」を上げることに重心が変わっていったと捉えることができるかもしれない。

前節でも〔接続詞〕・〔終助詞〕としての使用傾向が、特に会話においては A～C までと比べて、D 以降で一段階減少していることを見た。言語の状況を把握する上で、前半と後半とを区分して、概括的に捉えることには意味がありそうである。そこで以下、便宜的に前半期 = A～C と後半期 = D～F とで分けることによって状況の俯瞰的な把握を試みることにする。

なお、上記の①～③の把握において C は AB と D 以降の中間の状況を示しており、正確には AB→C→DEF の把握が必要である。前半期 = A～C と後半期 = D～F の 2 分法は、全体的な様子を捉える際の便宜的措置であることを強調しておきたい。

### 3.4. 主編者の交代との関係

『上方はなし』では初期ほど音声落語の使用状況に近く、固有の特徴（サカイ→ノデ・デの多用）は後期に行くにつれて明瞭になっていた。この様子について、前節では次第に固有性≡「読み物としての落語らしさ」を濃くしている可能性があるとした。このことと、主編者の交代の関係について整理しておきたい。

A～F の区分は、主編者の交代に着目して行ったものであった。C と F については編集者が中浜静圃＝四代目桂春団治であることが知られている。一方、AB および DE は中浜静圃の関与の度合いが薄いこと、見えないことが確認されている。もし仮に、C と F に大きく共通する傾向が見えるのであれば、編集者が誰であるかということが表現の選択に直接関わっていることを証する有力な根拠になる。ところが、表を見る限り、その傾向はうかがえない。むしろ、C は B までの特徴を色濃く受け継ぎ、D 以降の特徴を出し始める位置づけにあり、F は E までに観察される流れがおおよそは反映している。そこには、各期で順次、あるベクトルに向かった方向性がうかがえる。そこで、編集者と表現の選択とを直接に結びつけるのではなく、刊行期との関係を問うことを第一義として、以下考えていく。

## 4. 落語資料の固有性Ⅱ－1 の検討、並びにⅠの要素との関係について－

### 4.1. 接続辞の使用と位相

次に『上方はなし』が「落語」であるからこそその特性部分を見ておこう。落語には様々な人物が登場し、それぞれの性格付けが言語によって行われる。ここでは、同資料中で登場する人物別に使用する接続辞に注目する。

以下に、竹村（2019）で付与される話者属性に基づいて、出現度数 15 以上であるものを取り上げ、使用例数を表 4 に示した。表中、一定の使用頻度以上、及び以下と認められる箇所、それぞれマークを付している。

表4 『上方はなし』話者別使用状況

|      | カラ                             | ノデ  | デ  | サカイ | ヨッテ | (他) | 総計  |
|------|--------------------------------|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| 語り   | 74                             | 232 | 8  | 16  | 7   | 36  | 373 |
| 男    | 50                             | 216 | 87 | 85  | 99  | 22  | 559 |
| 女    | 5                              | 55  | 12 | 35  | 26  | 1   | 134 |
| 番頭   | 19                             | 39  | 10 | 18  | 11  | 16  | 113 |
| 喜六   | 2                              | 29  | 12 | 19  | 31  | 4   | 97  |
| 清八   | 10                             | 36  | 12 | 9   | 24  | 6   | 97  |
| 丁稚   | 1                              | 21  | 9  | 22  | 18  | 2   | 73  |
| 親旦那  | 6                              | 13  | 15 | 6   | 17  | 9   | 66  |
| 若旦那  | 2                              | 5   | 4  | 11  | 20  | 2   | 44  |
| 武士   | 18                             | 4   | 4  |     |     | 17  | 43  |
| 男・老人 |                                | 15  | 12 | 3   | 3   | 5   | 38  |
| 女中   | 4                              | 14  | 13 | 1   | 2   | 3   | 37  |
| 源兵衛  | 1                              | 12  | 3  | 3   | 12  | 31  | 31  |
| 駕籠屋  | 3                              | 12  | 5  | 3   | 6   | 29  | 29  |
| 子供   | 6                              | 4   |    | 13  |     | 1   | 24  |
| 船頭   | 3                              | 5   | 13 |     |     | 21  | 21  |
| 庄屋   | 8                              | 3   | 3  |     | 2   | 2   | 18  |
| 芸妓   |                                | 4   |    | 3   | 4   | 4   | 15  |
|      | 各話者の使用原因理由辞中、該当形式の占有率が2%以下の箇所。 |     |    |     |     |     |     |
|      | 上記の占有率が高い(30%以上を占める)箇所。        |     |    |     |     |     |     |

表から「地」部分にあたる「語り」ではノデが中心であって、デやヨッテが避けられている様子が見て取れる。カラの多用傾向も明瞭であり、共通語形が選ばれる傾向が強い。観客相手に語る「地」でデ・ヨッテが避けられることについては、この2形式には位相的に話し言葉として俗的な色合いがあったことを示すものとする。

「会話」部分に関しては、それぞれに括る登場人物には複数の漸に登場する異なった者も含まれる。そこで以下、特定の人物に限定して、その詳細を見る。ノデは多くの話者によって多用されるので、それ以外の形式で特徴を示す者を中心に取り上げていく。

まず「女中」にデが多めであることに注目する。「女中」の中に、『上方はなし』28集集載の「仔猫」で登場する「田舎から出たての婢さんおなごし」がいる。この「婢さん」は原因理由辞全7例中デ6例、カラ1例であり、デを多用する話者である。

- (5) 私わし、横町の口入屋ひとおきやから来りましたがお、今小まげな子と、連れこのふて来りましたがお、途中ではぐれて、行先が判らんで教へて呉れんか。

(「仔猫」28集 p.35)

「仔猫」はA～FのうちのC(前半期)に編集されており、デの多用が鮮明になる前の段階に位置づく(図2参照)。これらのデは、「田舎から出たての婢さん」を描き出すのにふさわしい語形として選定されたものとみられる。

同じくデを多用する話者に「船頭」がある。「三十石夢の通ひ路」に登場する「船頭」が全15例中デ12例、カラ2例（いずれも「それぢやから堪忍まいよと云ふのぢや」、ノデ1例である。

(6) お客さんよ国から出て来てまだ間が無い者ぢやでのう堪忍まいよ。

（「三十石夢の通ひ路」36集 p.27）

「三十石夢の通ひ路」第36集は後半期Eの作品であるが、この船頭は「馬方船頭お乳の人と云ふて言葉は荒いが気達は宜え」（同 p.27）者としての設定である。その独特の言葉遣いにデを原因理由辞として用いさせているとみられる。

ヨッテ・サカイを用いないという点で特徴的なのが「武士」である。第9集「大名将棋」には複数の紀州の武士が登場するが、上下関係のある武士同士が表現を共通語に整えてやり取りをしている。この場合、カラ3例、ノデ4例、「(他)」でカウントするユエ7例と、方言形が全く用いられていない。第47集「ベカコ」にも肥前の武士が登場するが、カラ12例、デ1例と偏りを示す。地方を舞台とする場合に限らず、京都・大阪を舞台とする場合でも、武士に関しては方言形の使用は回避されている。

(7) コリヤ其方は乱心者と相見える、予が此処にて手討に致すから左様に心得よ。

（「瘤弁慶」44集・舞台=京都寺町）

続いて、女性語という括りなどで特徴づけられることがある「女」を取り上げる。「女」には複数の人物が該当するので、まずは演目別に原因理由辞の使用状況を示そう（表5）。

表より、全体としてカラが低頻度であること、「(他)」にカウントするユエの使用がほとんどないことなど、使用を避ける形式の存在が目立つことがまず指摘できる。前・後半期での相違という点では、サカイの用い方が注意される。前半期にはサカイを集中

表5 「女」の原因理由辞・使用状況

| 前半期 |       |    |     |    |     |     | 後半期 |      |     |        |    |     |     |     |     |     |      |
|-----|-------|----|-----|----|-----|-----|-----|------|-----|--------|----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 集   | 演目    | カラ | ノデ  | デ  | サカイ | ヨッテ | (他) | (計)  | 集   | 演目     | カラ | ノデ  | デ   | サカイ | ヨッテ | (他) | (計)  |
| 01集 | 猿後家   |    |     |    |     |     | 3   | 3    | 32集 | お玉牛    |    | 4   | 1   |     | 4   |     | 9    |
| 05集 | 子は錠   | 3  | 3   | 1  | 12  |     |     | 19   | 33集 | 高津の雷   |    | 2   |     |     |     |     | 2    |
| 07集 | 夢見八兵衛 | 1  |     |    |     |     |     | 1    | 37集 | 紺田屋    |    |     |     | 1   |     |     | 1    |
| 17集 | 貝野村   |    |     |    |     | 1   |     | 1    | 38集 | 遊山船    |    |     |     |     | 1   |     | 1    |
| 18集 | 口入屋   |    |     |    | 3   |     | 1   | 4    | 40集 | 後家馬子   |    | 19  | 1   |     | 5   |     | 25   |
| 20集 | 尻餅    | 1  | 1   |    | 7   | 4   |     | 13   | 41集 | 五人載き   |    | 1   |     |     |     |     | 1    |
| 22集 | 欽潟    | 1  |     |    |     | 1   |     | 2    | 42集 | 鮑貝     |    |     | 1   | 2   | 1   |     | 4    |
| 24集 | 貧乏花見  |    |     |    | 1   |     |     | 1    | 43集 | 三人旅(下) | 1  |     |     |     |     |     | 1    |
| 26集 | 船弁慶   | 3  |     |    | 8   | 1   |     | 12   | 44集 | 悟気の独楽  |    | 13  | 1   |     |     |     | 14   |
| 30集 | 三枚起請  | 1  | 1   |    |     | 3   |     | 5    | 48集 | 猫の忠信   |    | 2   |     | 1   | 3   |     | 6    |
| 前半期 |       | 4  | 9   | 3  | 31  | 13  | 1   | 61   | 後半期 |        | 1  | 46  | 9   | 4   | 13  | 0   | 73   |
| 小計  |       | 7% | 15% | 5% | 51% | 21% | 2%  | 100% | 小計  |        | 1% | 63% | 12% | 5%  | 18% | 0%  | 100% |

※網掛けは、各斬中の最多使用形式に付している。

的に用いる演目が複数あるのに対して、後半期ではサカイは一気に減って代わりにノデを多用する演目が目立つ。近代大阪語において、サカイを女性が多用する傾向があることは金沢（1993）でも指摘されていた。その特徴は前半期の漸でのみうかがえる。後半期ではその特性に覆い被さるかのようにノデが多用されている。後半期の傾向は、『上方はなし』全体のそれと連動するものであることから、一旦区別して考えると、その他の面（サカイの多用、カラ・ユエの忌避傾向等）に関しては、登場する「女」に付与された言語特性と見ることができる。

以上は、いずれも登場人物の設定との関係で形式が偏ると理解される事例であった。落語は口演による方法のみで聴衆に過度の負担を与えずに（つまり客・読者にとってはわかりやすい方法で）複数の登場人物を描き分けなければならない。その登場人物のキャラクター設定に際し、特定の形式を付与することが効果的に働こう。断片的な観察ではあるが、以上は落語ゆえに特徴づけられる側面と見てよいと考える。

#### 4.2. 話者別の傾向とIの要素との関係について

ただし、上記のように原因理由辞の使用に際して明確な特徴づけを行われる話者は一部であり、際立った使用傾向がうかがえない登場人物も少なくない。そういった者の中には、前節の「女」のノデ使用がそうであったように、『上方はなし』の文体傾向の方針をそのまま反映するケースも出てくる。ここで、複数の漸に頻繁に登場する「喜六」と「清八」を例にそのことを見ておきたい。

喜六と清八は、上方落語にしばしば登場する架空の人物である。喜六はうっかり者（ボケ）、清八はしっかり者（ツッコミ）の役割を担う。『上方はなし』では計14話において原因理由辞を用いて登場する。喜六はカラをほぼ用いず、その分ヨツテの使用がやや目立つという特徴があるが、清八ともども、おおむね各形式を平均的な頻度で用いる。そういった登場人物では、各漸の刊行期の前半と後半とで使用形式がどう変わるのかを次の図3に示した。

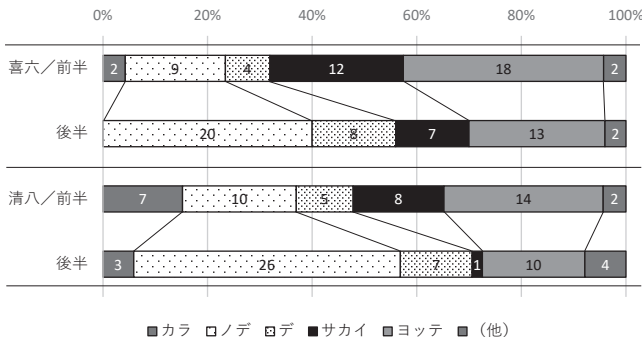


図3 喜六・清八の原因理由辞使用状況

図3より、喜六の方がサカイ・ヨッテを多用し、相対的に清八がカラ・ノデを頻用する様子が見える。前・後半の推移という観点で言えば、喜六・清八の両者ともにノデ・デの使用頻度が上がり、カラ・サカイ・ヨッテの使用頻度を下げる点で完全に一致している。これは、3.3で見た『上方はなし』全体で観察された推移のありかたそのものである。特定の形式を用いる性格付けが行われない人物の場合、『上方はなし』全体としての表現方法が推移する中で、あわせて言葉遣いも変化しているということである。

ところでIを特徴づける上で象徴的形式ともいえるノデ・デが、『上方はなし』の後半期に使用が増すことの意味について考えておきたい。まず、両形式の用法上の特徴として、どちらも共に原因理由表現とすべきかどうかの判断に迷う例が少なくないという共通点を挙げるができる。

(8) a 「マア聞いて、辻の角でおまやんにベツタリと逢ふたんで、おまやん宜い処で逢ふた一寸話が有るね其処まで付合ふてんかと風呂屋の横手のろうじへ入つて二人でボシヤボシヤと話をすると、其処へ来たのがその後藤一山や…」

(「くしゃみ講釈」45集 p.5)

b 「へい甚い折角<sup>せつかく</sup>でおますが、私の方は酒売元でござりますで、居酒屋は誰方様でも、お断りを申して居ります」

(「運附酒」40集 p.9)

(8a) では起きた出来事が並列する表現において、ノデがそれらの事態をつないでいる。前件と後件は積極的に因果関係として示さなければならない関係にあるわけではない。(8b) でも前件と後件で話者の認識とは関わらずに存在する外界の事実が並列される。デは順接ではあるものの、前件と後件の必然的な生起関係を示すものではない。ノデはそもそも、デが江戸期に準体助詞「の」を取ることでできた形式であり、ここに見るノデ・デの原因理由の構成上に見る特性は共に相通じるものと考えられる。

近代大阪語を記述分析する山本(1962)では「ノンデ(ンデ)は、前二者(稿者注:サカイ・ヨッテ)に比べて、理由・原因のさし方がそれ程強くない。」とある。前田(2009:136)も、現代共通語のノデの用法上の特徴として、上記に類した例を挙げながら「「から」に置き換<sup>え</sup>と、前件が後件の理由であるというニュアンスが強<sup>く</sup>出過ぎるようである。むしろこれらの「ので」節は、「と」節に近く、継起的に起こるいくつかの動作を描写する際の一つに用いられている。」としている<sup>8</sup>。

こういったノデ・デは、いわば事態の並列に結果的に因果関係を見出させる方法である。汎地域的のうかがえる特性でもあり、この形式の持つ構造的な特性としてあるものと理解される。この方法は、その因果関係の取り結びにおいて、会話における話者、地における語り手を背景化させる。『上方はなし』が後半期において口演の再現から距離

<sup>8</sup> 京都市方言を対象とする中井(2008)も「ノデについては、明確な理由を表す場合とそうでない場合の境界がはっきりしない」ことがあるとし、古く永野(1952)もノデに「事からのうちにすでに因果関係にたつ前件・後件が含まれていて、それをありのままに、客観的に描写する場合に使われる」という性質を指摘している。



を置き、読み物としての性質を強める様子にあることを、ここまでも繰り返し指摘してきた。ノデ・デによる、主体の積極的な関与を稀釈化させる表現方法は、その成立事情において選好されたものであった可能性があることを指摘しておきたい。

## 5. 落語資料の固有性—Ⅱ—2の検討、並びにⅠの要素との関係について—

### 5.1. モノ・コト+接続辞の多用

先に2.2で、[接続詞][終助詞]といった周回の用法の使用頻度の低さに、談話資料とは異なった落語としての文体の一側面を観察した。本節ではさらに、落語資料が因果関係の把握・提示に際して示す特徴について見ておく。ここでは速記本か、口演かの違いを超えて、落語資料に共通して見出せる要素が重要になる。かつて稿者は矢島(2013)において、速記本に見られるモノダカラの使用に速記者などの「個人差を映しやすい表現」としての特徴が見出せることを指摘した。そのことをヒントに、以下、モノダカラとコトダカラ(=[モノ・コト+断定辞+接続辞])を取り上げる。

- (9) a ~と云いはりますのに、内の旦那はんが強情なもんやさかいに、こうしてあんたはんとこへ来んならん様に成りました。(「次の御用日」14集 p.19)  
 b お前が礼云へ礼云へ云ふもんやさかい礼云ふたんや。(「貧乏花見」24集 p.52)  
 (10) a 今頃気が附いたのか、今日の咄でお前はよう寝るといふ事やさかい寝られたら困る寝ん様にそうして床板をなぐらしておくのや(「夢見八兵衛」7集 p.23)  
 b 太「ヘイ、どうもえらいことをしました」番頭「何んぼいふても返らぬことぢやから早う帰りなされ」(「猿後家」1集 p.29)

これらの形式の使用状況を、資料別に示すと表6の通りとなる。

表6 [モノ・コト+断定辞+原因理由辞] 使用状況

|      |    | モノ | コト | 〈左以外〉 | (計) | モノ% | コト% |    |
|------|----|----|----|-------|-----|-----|-----|----|
| 談話資料 |    | 3  |    | 390   | 393 | 1%  | 0%  |    |
| 落語   | 音声 |    |    |       |     |     |     |    |
|      | 会話 | 13 | 3  | 134   | 150 | 9%  | 2%  |    |
|      | 地  | 6  | 1  | 51    | 58  | 10% | 2%  |    |
|      | 会話 | 前半 | 33 | 17    | 780 | 830 | 4%  | 2% |
|      |    | 後半 | 7  | 9     | 640 | 656 | 1%  | 1% |
| 上方   | 地  | 前半 | 14 | 4     | 208 | 226 | 6%  | 2% |
| はなし  |    | 後半 | 2  |       | 145 | 147 | 1%  | 0% |

※「モノ%・コト%」は各資料「計」に占めるモノダカラ・コトダカラ類の占有率を表す。

表の調査結果より、落語では談話資料に比べて音声落語・速記本共にモノダカラ・コトダカラを取る頻度が相対的に高い様子がうかがえる。特にモノダカラは音声落語での使用が目立ち、速記本は音声落語と自然談話との中間的な頻度と言えそうである。コト

ダカラに関しては、談話資料では使用が見当たらないのに対して、落語資料では数は少ないながらも使用例が見える点が注意される。

モノダカラの形式については現代共通語を対象とした考察があり、「[から]」[ので]」に比べると、事態の客観的な因果関係ではなく、話し手にとっての主観的な判断による因果関係(日本語記述文法研究会編 2008:138)を表す際に用いるとされる。(9a)の「内の旦那が強情である」せいで、「こうしてあなたのところへ奉公に来なければならないようになった」とすることに、「話し手にとっての主観的な判断」に基づく因果関係の捕捉態度が見て取れるということである。(9b)では、礼を言われたことに腹を立てる話者が、「礼を言え→礼を言った」という因果関係にある現実事態を、やはり大いなる不満をもって、すなわち「主観的な判断」に基づく態度で捉えている。これらの表現例は「もの」は介さない形式でも同様の因果関係を表すことができる(9a「うちの旦那が強情だからこうして来なければならないになりました」、9b「礼を言えというから言ったのだ」など)。そうした場合、事態に見出される因果関係が1つの出来事としてのみ提示される。そこにあえて「もの」を介する形式を取ることで、登場人物の、文脈に対する態度が表示できる。つまり、登場人物がどういう「つもり」で場面を構成しているのかを明示する効果を、この形式はもたらすことができる。

一方のコトダカラは、現代共通語においては「話し手の判断や行為要求の根拠となる事情を表す」、「主節に述べられる話し手の判断や行為要求などは当然のことだ、妥当なことだ」という主張を、やわらげて表現する形式である(日本語記述文法研究会編 2008:139)とされる。モノを用いる方法と異なり、前件で示される理由・根拠を、話者個人の思惑を超えて外界に厳然としてある事実として押さえるのが特徴的である。それによって、「主節に述べられる話し手の判断や行為要求などは当然のことだ」という主張態度となる。前件で、話し手も聞き手も知っていて、当然のこととして受け入れられるべき事柄を取り上げることで、後件の主張の正当性が裏付けられるという構造であり、この方法もモノダカラとはまた異なった意味合いで、登場人物の事態に対する把握態度＝「つもり」を積極的に伝える表現である。この形式を用いることで、文脈や場面に登場人物がどう形作ろうとしているかが明示的に伝わることとなる。

先に見た通り、[接続詞][終助詞]は落語の文体で使用が抑制されていた。その表現は、談話を相手にどう伝えたいかというレベルに属するものであって、落語において低頻度だったのは、対人的な要素を必要以上に用いないことを示すと理解される。それに対してモノダカラ・コトダカラは話者がどういう「つもり」でその因果関係を捉えているかを伝える、いわば対事的な要素に対する態度・姿勢を表すものである。談話資料と比べて落語資料ではモノダカラ・コトダカラを用いる頻度が相対的に高かった。落語の、特に音声で語る口演において、線条的に瞬時に消えていく情報のみをもって、的確に聴衆に場面を理解させたい時に、これらの形式は効果的だったものと理解される。モノダカラ・コトダカラを原因理由節で多用することは、落語資料においては必要性があつて

起きていた現象と理解したい。

加えて注意されるのが、『上方はなし』における刊行期との関係である。表6に見るとおり、会話・地ともに明らかに前半期の方がモノダカラ・コトダカラを取る頻度が高く、音声落語との状況に近い。後半期にはかなり頻度を下げており、前半期に実現していた「落語」らしさとは異質な言語を用いている様子がかがえる。この変化は、登場人物のコンテクストに対する「つもり」を表現形式に込める方法ではなく、因果関係を一般的な方法で表現することを選択したことを物語る。速記本という読み物の特に後半期においては、直に「つもり」を明示するのではなく、素材の正確な描写や配置によって読み手にストーリーを読み取ってもらう方法を優先した結果と理解される。

モノダカラ・コトダカラの『上方はなし』における使用の偏りも、ここまで見てきた状況——〔接続詞〕〔終助詞〕の低頻度化、ノデ・デの多用化——などの、音声落語との乖離の度合いを高めていたことと合わせて、後半期に同資料が読み物としての性質を前面化していく中で起きた変化として位置づけられるものとする。

## 5.2. 〔接続詞〕の用法

ここでは再度〔接続詞〕を取り上げ、本資料の特性を反映して用いられる部分を見定める。〔接続詞〕は、そもそも落語では談話資料に比べて使用が抑えられ、中でも速記本では音声落語よりもさらに使用頻度が低く、とりわけ刊行の後半期においてその使用傾向の低下が目立つのであった(3.2)。用法を細分化して、そのことの意味を検討する。

〔接続詞〕の用法は、その使用がコンテクストの中で因果関係にある表現を特定し得るものであるか否かで二分される。

(11) a コラ、小売をせぬのは元より解つてあるわい、然うや依つてに頼んで居るのぢやないか、…  
(「運附酒」40集 p.10)

b 「向ふのおなごし下女に一遍おじぎさしたろ、一寸姐はん、私定宿があるで」「そうやから私は何も申してまへんがな」「ア、左様か、大きに失礼を」

(「三人旅(下)」42集 p.48)

(11a) は、「然うや依つてに」の先行文を理由とし、それに基づいて後続する文が成立することを表す。前文を前件、〔接続詞〕以下を後件に見立てると「小売りをしないのは元よりわかっているから頼んでいるのじゃないか」と文意が通る表現となる。一方(11b) は、先行文や文脈に直接〔接続詞〕以下の表現の原因理由の関係にある表現が想定されない。小西(2000)はこの違いに着目して、「ダカラの前の発話あるいは状況から読みとれる命題 P と、ダカラの後の発話 Q とを、接続助詞カラで接続した『P(ダカラ、Q)』という一文に言い換えられるか否か」を基準として、(11a) のように言い換えられる類を〈理由-帰結〉用法、(11b) の類を非〈理由-帰結〉用法と区別している。本稿でもその方法にならい、次に示す呼称によって区別する。

原因理由系の  
〔接続詞〕

- ①. 帰結的用法 …先行文が後続部の理由を構成
- ②. 非帰結的用法 …(上記以外)

①②は必ずしも截然と区別されるものではないが、おおよそ調査範囲内の該当例を弁別すると次の表7に示すとおりであった。

表7 〔接続詞〕の用法別使用状況

| 資 料       |    |    | 帰結 | 非帰結 | (計) |
|-----------|----|----|----|-----|-----|
| 談話資料      |    |    | 42 | 43  | 85  |
| 落語        | 音声 | 会話 | 6  | 4   | 10  |
|           |    | 地  | 1  |     | 1   |
| 上方<br>はなし | 会話 | 前半 | 25 | 15  | 40  |
|           |    | 後半 | 16 | 4   | 20  |
|           | 地  | 前半 | 1  |     | 1   |

この表からは次のことが読み取れる。

- ・談話資料では、帰結的用法と非帰結的用法の使用頻度に差が見えず、ほぼ同頻度で用いる。落語は音声による口演、書記言語による速記を問わず、帰結的用法が若干多めであり、非帰結的用法が少なめである。
- ・『上方はなし』のうちでも、〔接続詞〕の使用に占める非帰結的用法の割合は、前半では音声落語と同程度であるが、後半期は格段に低下する。

非帰結的用法では、前件と後件の関係表示ではなく、談話に対する話者の態度が表現される。そのような談話的要素が強い表現の使用が、後半期の『上方はなし』では抑制されている。書記言語を用いた、口演の再現から離れた読み物としての特徴の具体的な現れの一つとして注意される。

ちなみに〔接続詞〕が構成要素とする断定辞の形式に着目した場合にも同じことが言える。同資料の基本的な断定辞はヤであり、それは近代大阪語の趨勢を反映するものである(金沢1991参照)。(〔接続詞〕に含まれる断定辞も基本的にはヤであるが、以下のように共通語と共有する語形ダもその構成要素とする場合がある(全2例)。

- (12) a 一本の手紙もよこさぬといふは、実に不実なもんでごわすなア、だから、若旦那へ、あんまり色町へは深はまりを遊ばさんように、月の中、先ず一度か二度、よう行て三度ぐらいにあそばすよう。(「たちぎれ線香」03集 p.30)
- b 雨天に入用の品物とも、何とも左様なことは分りやア仕ません、だから追うてさえ遣りやア宜いので御座ります何うも番頭さんに似合わぬことちやと思ふて居りました。(「市助酒」08集 p.22)

(12ab)の「だから」はいずれも指示詞を冠さず、後続文の原因理由となる前件を見出

することができない非帰結的用法である。「だから」以下に続く発話が理由や根拠に基づいた判断であって、聞き手に同意されるはずという談話上の態度が表される。この「だから」の用法に関わっては、矢島（2019a）でも、談話資料を含めた近代大阪語で、共通語と同形のままで取り込んでいる様子を確認している<sup>9</sup>。今回の調査範囲でも、談話資料では「だから」が〔接続詞〕85例中16例（18.9%）を占めるのであるが、それに比べると速記本での出現状況は極めて低い。しかもそのわずかの使用例が共通語から取り込む用法であり、なおかつ前半期中の2演目のみに現れたのであった。「だから」は形式面においても共通語形との重複がわかりやすく伝わる形式である。そもそも非帰結的用法は談話機能が明瞭であり、書記言語においては異質な用法と言える。こういった用法を担う「だから」が後半期の資料では用いられていないことに、『上方はなし』の特徴が現れている。

## 6. 資料に実現する文法

### 6.1. 『上方はなし』に描かれる文法

以上、『上方はなし』を大きく3つの言語層に分け、それぞれに特徴的な文法を観察してきた。まず、『上方はなし』の表現の基盤部分は当代の大阪語によって構成されているということが、前提としてあった。原因理由辞としてカラ・ノデ・デ・サカイ・ヨツテ類を用いること、それらには〔接続詞〕〔終助詞〕的用法があって、談話標識としても用いられ得ること、モノダカラ・コトダカラ類が各機能をもって用いられることなどが該当する<sup>10</sup>。その基盤の上に、『上方はなし』は、それぞれの方法を、落語の文体としてふさわしくあるよう、選択していた。例えば、「婢」「船頭」「武士」「女」など、特定の話者に特定の形式を用いさせる（あるいは用いさせない）ことや、〔接続詞〕〔終助詞〕など対人的要素に関与する形式を必要以上に用いないことなどにその側面を見出せる。

そしてその落語としての特徴は、『上方はなし』では、成立の前後半とで異なった様子を示していた。例えば登場人物の因果関係の捉え方を明示するモノダカラ・コトダカラ類や、談話的な要素が濃厚の〔接続詞〕の非帰結的用法などは、いずれも前半期に成立した集で多用する。対照的に、事象をノデ・デで並列し、因果関係を積極的に明示しない、その意味では読み手の理解を必要以上に先回りして補わない表現を後半期の資料で多用する。そこに読み物としての『上方はなし』固有の文法の実現を見出すことができるとしたものであった。

<sup>9</sup> ちなみに、大阪語資料において「そやさかい」等の方言形による〔接続詞〕でも非帰結的用法を表す例は見出せる。しかし、「だから」に比べるとその使用頻度は高くない（矢島 2019a）。

<sup>10</sup> それらは近代共通語ともいえるべき、全国に広く共有される言語に位置づけるべき部分も含まれるが、本稿の範囲ではそこは議論の対象としていない。注6参照。

各層に見出される文法のそれぞれの使用意義は、以下のように確認されよう。

落語資料は、談話資料と比べ、談話機能が前景化する〔接続詞〕〔終助詞〕の使用が抑えられる一方で、モノダカラ・コトダカラという話者の事態に対する把握姿勢が鮮明化する方法は多用する。話者の談話構成態度の表明を最低限に止め、事態の把握姿勢の表現に力を注ぐ。落語の話を作成する際の、落語にふさわしい表現＝「大阪を舞台とした大阪人のやり取りをわかりやすく伝えること」のストラテジーのあり方の一側面が、そこにはうかがえる。

ただし『上方はなし』では、前半期には鮮明だったその姿勢も概して後半期の演目では稀薄化していく。瞬時に消える音声言語による口演では、実際の会話の再現性が重視される。それに対して、時空を超える書記言語を用いる速記本では、「読みものとしても調子のあった読みいい」ことを工夫してもいいし、「がっ`ちりとした内容」を残すことを重視することもできる（(4) 参照）。話者の事態に対する思いをモノダカラ・コトダカラという「手法」によらずに描き出す方法を選び、またカラ・サカイ・ヨッテによって因果関係を積極的に描写する方法よりも、ノデ・デによって因果関係にある事態の並列をもって語らせる方法を選ぶ。一步踏み込んだ言い方をすれば、刊行の後半期の『上方はなし』では、登場人物の思いを直接的に描き出すことより、事態を描き込む方向にシフトしているということができのかもしれない。さらに、複数の事象を用いて検証すれば、そのように全体の方向性を把握することの適否も問えることであろう。

以上に見るように、『上方はなし』の文法は、基底をなす近代大阪語としての文法領域のうち、落語としての特徴に即した形式の選択により文体を整え、さらに速記本という書記言語にふさわしい方法の選好を加えたところに実現していた。改めて言語資料というものが、それぞれ複数の成立要請に応じつつ成り立っているものであることが理解される。

## 6.2. 資料と文法研究

以上『上方はなし』を対象として、それぞれの成立事情に基づく資料が、さまざまな性質を含み持つことについて観察してきた。そのことはただ『上方はなし』にのみ当てはまることではない。本稿で調査対象とした談話資料も例外ではない<sup>11</sup>。そもそも通常の談話では、同じ話者でも話題に応じて、あるいは年長者・初対面者など談話相手に

<sup>11</sup> 本稿で対象とした談話資料中の話者別に使用する原因理由辞を見ると、カラが特に男性話者に広く用いられていること（男性 332 例中カラ 202 例、女性全 61 例中 9 例のみ）、サカイは女性に多く（男性 45/332 例、女性 44/61 例）、男性は一部の話者がサカイを集中的に用い（10 人中 1 人が 29/45 例使用）、ヨッテも特定の男性に集中的に用いられている（14 人中 1 人の男性がヨッテ全 30 例中 25 例使用）ことなどがわかる。どういった話者をインフォーマントにするかということだけでも、大きく異なった調査結果が得られることが容易に想像される。

応じて、さまざまに様式を切り替えて表現形式の選択を行う。本稿ではそういった多様に広がる事情を問わずに、たまたま資料として切り出された談話を単純に一括して「談話資料」とする方法を取っている。それを比較資料として用いた本稿の限界も、また押さえておかなければならない。

多くの文法研究は、そういった個別の問題を承知の上で、「Ⅲ. 近代大阪語としての文法」を検討対象とする。複数の資料の様子を取りまとめれば共通部分の抽出によって言語把握の精度は増すであろうし、またそれらを成立順に配置して遠目に見れば変化の枢軸も押さえられる。それまで見えなかった表現形式が現れていれば、資料成立期に使用があったことの証拠とすることもできる。多くの通時的な文法研究はその方法によって行われてきた。そこに妥当性を見出すことができるのも事実である。

その一方で、今一度、それぞれ文献がそれぞれの成立事情のもとに成り立っているものであるという当たり前の事実にも目を向けておく必要があるであろう。一資料が示す、特定形式の有無、あるいは多寡についての評価は、よほど慎重でなければならない。落語資料の原因理由辞の様子をもって、近代大阪語ではモノダカラ・コトダカラを多用していたと直ちに言えないことなどはその代表例である。

しかし、そのことに自覚的さえあれば、一資料が示す情報はきわめて豊富であることにも気づくことができる。モノダカラ・コトダカラを落語が多用することがわかれば、落語の文体の要請事情と突き合わせることによって、その用法の本質分析に、よりの確に近づくことが可能になる。各資料の性質を正確に押さえた言語研究は、その方法でしか得られない精度と厚みをもたらす。資料性に自覚的な言語研究の貢献は、新たにさまざまに可能であると考えられる。

### 【使用コーパス】

国立国語研究所 (2019) 『日本語諸方言コーパス (Corpus of Japanese Dialects: COJADS)』中納言 2.4.5 データバージョン 2021.01

### 【参考文献】

- 金沢裕之 (1991) 「明治期大阪語資料としての落語速記本と SP レコード」『国語学』167
- 金沢裕之 (1993) 「明治期大阪語の順接確定表現」『岡山大学言語学論叢』3
- 金澤裕之 (2019) 「SP 盤落語レコードとその文字化について」金澤裕之・矢島正浩編『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院
- 金澤裕之・矢島正浩 (2019) 『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院
- 小西いずみ (2000) 「東京方言が他地域方言に与える影響—関西若年層によるダカラの受容を例として—」『日本語研究』20 (東京都立大学)
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子 (2017) 「周辺部研究の基礎知識」小野寺典子編『発話のはじめと終わり 語用論的調節のなされる場所』ひつじ書房

- 竹村明日香 (2016) 『『上方はなし』コーパスを通してみる京阪方言語彙—近世上方語及びナラン・イカン・アカンの諸相—』『国語語彙史の研究』35
- 竹村明日香 (2019) 『『上方はなし』コーパス (試作版)』(2019年3月15日確認、『ひまわり』ver.1.6.2)
- 竹村明日香 (2021) 『『上方はなしコーパス』について—近代大阪方言の速記落語—』田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房
- 中井幸比古 (2008) 「京都方言の形態・文法・音韻 (1) —会話録音を資料として (1) —」『方言・音声研究』1 方言・音声研究会
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版
- 永野賢 (1952) 「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29-2
- 船木礼子 (2007) 「京都市方言の原因・理由表現」方言文法研究会編『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』科学研究費補助金研究成果報告書
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文』くろしお出版
- 矢島正浩 (2013) 『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院
- 矢島正浩 (2019a) 「近現代話し言葉資料における原因理由系の接続詞的用法について」『国語国文学報』77
- 矢島正浩 (2019b) 「なぜ落語資料なのか—序に代えて—」金澤裕之・矢島正浩編『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院
- 山本俊治 (1962) 「大阪府方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂

【付記】本研究は、JSPS 科研費 18K00610 並びに 21K18359 の助成を受けたものである。  
(やじま・まさひろ 本学教授)